

11日目 浜松 -> 舞阪 -> 新居

11日目は7月10日(土)、浜松に6時半に到着、駅近傍の開業しているレストランを探し、牛井のスキヤを見つける。朝っぱらから牛井はないな、と思うものの他に選択肢は無し、鮭と納豆の朝定食をオーダー。

浜松宿 29 番目

浜松駅から JR で天竜川駅へ、天竜川駅を7時半にスタート、薄雲がかかっているものの朝から暑い。まずは旧東海道に戻り、特に名所旧跡の無い街道を浜松市街まで1時間ほど歩く。

いつものお供の FM ラジオの受信状態は良好、最初の音楽は「瀬戸の花嫁」、FM で歌謡曲が流れるのは珍しく、考えてみたら、FM で民謡も聴いたことがない、選局が偏っているのかもしれない。街の中心に浜松城があるはずなのに見渡してもそれらしきものは見当たらない。旧東海道から外れて浜松城公園にはいっても城は見えず、標識に従って歩いていくと石垣があり、更に登ると三層の小さな天守閣が現れ、150 円也を払って入場。徳川家康の居城なので大きな城をイメージしていたが、城自体は大きなものではなく、天守閣も小さい。

浜松城

浜松城の天守閣



徳川家康は織田信長と織徳連合を組み、この浜松城を拠点として武田信玄と戦い、三方ヶ原の戦いで負け、この浜松城に逃げ帰るが、信玄の病没で武田軍は信州に退却し、命運を保った。その三方ヶ原は天守閣から眺めるとすぐ近くにあり、まさに指呼の間、信玄の病没が無ければこの浜松城は危うかったのを実感でき、本当に徳川家康は幸運の人と思える。運も実力の内か。

城内の通路には、「家康の散歩道」と書かれたのぼりが立ち、画用紙や絵の具を抱えた中学生がいたところに座っていたが、天守閣を出ての帰り道では、画材やピクニックシート、リュック、バッグがそこら中に置いてあるものの、中学生は一人もいない。

どこかで集合して先生の訓示でも受けているのだろうが、まるで盗って下さいと云わんばかりに荷物を無人で放りだして、本当に日本は安全ボケしている。

家康の散歩道ののぼり



若き日の徳川家康の像



城の中に、徳川家康の若き日の像があった。色んな時代小説から徳川家康のイメージは小太りの狸オヤジとなっており、わざわざ「若き日の」と付けざるを得なかったのかもしれない。像の家康が右手に持っているのは羊歯印で家康の兜にも付いており、家康のトレードマークの様である。この浜松城近辺には徳川家康ゆかりの旧跡がたくさんあるが、旧東海道から外れてしまうので割愛し、浜松城公園を出て、又旧東海道を一路西へ。浜松には宿場としての遺跡は何も残っておらず、かつてそこにあったことを示す説明板が所どころにあるのみ。

#### 浜納豆

ガイドブックに、家康が好んだという「浜納豆」を売っている店が載っているので、その店を探す。道路わきに一軒だけ回りから取り残されたような古い木造の家があり、そこが浜納豆の販売所。

店のガラス戸を開けると、昔ながらの土間があり、畳み1枚ほどの台の上にしょうゆ、みそ、浜納豆の袋が並べられ、昔の街角にあった駄菓子屋の雰囲気そのもの。ごめんくださいと声をかけるも応答はなく、中にはいりこみ、奥にむかって声をかけるとおばあさんが現れ、これも駄菓子屋のイメージどおり。浜納豆を買いたいのだが見たことも食べたことも無いので試食品はありませんか、と言うといきなり陳列してあった商品の袋をハサミで切り、どうぞと出され、面食らう。試食してみると、納豆の言葉のイメージと異なりネバネバは無く、味噌の味が塩辛く、2、3個食べると喉が渇き、喉が渇くでしょうお茶を入れますといわれ、冷たい水を所望。更に、塩辛いもののあとの口直しにと飴をだされ、これでは買わざるを得ない。聞けば、ガイドブック片手の東海道ウォーキングの客が多く、ガイドブックの著者も何度か来ているとか。

賀茂神社



#### 賀茂神社

近くに、賀茂神社があり、このあたりの出身の賀茂真淵が祭られている。昔、小学校か中学校か忘れたが、教科書に「松阪の一夜」との文があって、当時の権威の賀茂間淵と新進学者の本居宣長が松坂でたった一度歓談し、そこから古事記伝が書かれたとあったことを覚えている、と言うか、思い出した。歴史の教科書ではなく、国語だった気がする。



賀茂真淵は近世の日本国学の祖であり、「大和ころ」の思想が生まれ、水戸国学に引き継がれ、明治維新の「尊王」の思想となっていく。

歩きながら歴史の勉強をしている気もするが、試験さえなければ勉強も悪いものではないと思うようになってきた。

舞坂宿 30 番目

舞坂の松並木



浜松郊外を 10Km ほど歩いて、次の宿場、舞坂の松並木にさしかかる。この舞坂松並木は 1Km 弱もあり、良く保存されていて、松並木の真ん中(旧街道)は車専用(といってもすれ違うのかやつの幅)、松並木の両側は歩道となっており、東海道 53 次の全宿場の銅版画が点々と置かれていて散歩道の観光スポットになっている。

浪小僧



しかし炎天下、他に歩いている人は無し。

浪小僧

並木の最後に大きな像がおかれ、浪小僧との説明があった。「昔、魚が取れない日が続いたある日、真っ黒な小僧が網にかかり、気味悪がった漁師がその小僧を殺そうとすると、小僧は”私は海の底に住む浪小僧で、命を助けてくれたら、海が荒れたり、風が強くなる時には海の底で太鼓を叩いて知らせます”と言ったので海に戻し、それ以来、天気が変わる時に波の音がするようになったと伝えられている」とあった。この浪小僧の表情がいいので写真。

舞坂宿の脇本陣

松並木を出ると舞坂宿となり、全国で唯一現存している「脇本陣」があり、入場料無料なので見学。本陣は参勤交代の大名の宿で、脇本陣はその予備。

但し、脇本陣は大名が泊まらない時には旅籠と同様に一般の旅人を泊めても OK だったとのこと。大名用の畳のトイレがあり、脇息を置いた殿様用の部屋もあったが、3 方フルオープンとなる部屋で狭く、今のホテルの方がまさに大名旅行の感がある。

脇本陣の玄関



殿様用の部屋

脇息(きょうそくと読む)が置かれている



この脇本陣の説明員の方に近くでうなぎの美味しい店を聞き、その店でうなぎの重の昼食、2100円也、美味しかった。

#### 浜名湖

舞阪の道の正面は道が途切れて水面が見え、漁船のマストも見え隠れし、浜名湖に到着。  
江戸時代にはここから船で浜名湖を渡ったが、今は朱塗りの弁天橋を歩いて渡って弁天島へ。

浜名大橋の遠景



弁天島



左側は西浜名湖でその先には長い浜名大橋が見え、正面にはハワイのリゾートの様な雰囲気のある弁天島、右側は浜名湖で新幹線と東海道本線の鉄橋。弁天島には、「昔、弁天島あたりは白砂青松の美しい浜で、ある日、天女が舞い降りたが、村人の懇願にもかかわらず立ち去り、その後災害に見舞われて島になった、その天女は三保の松原に行った」と書かれていた。天女って一人しかいなかったのか。



山頭火の句碑

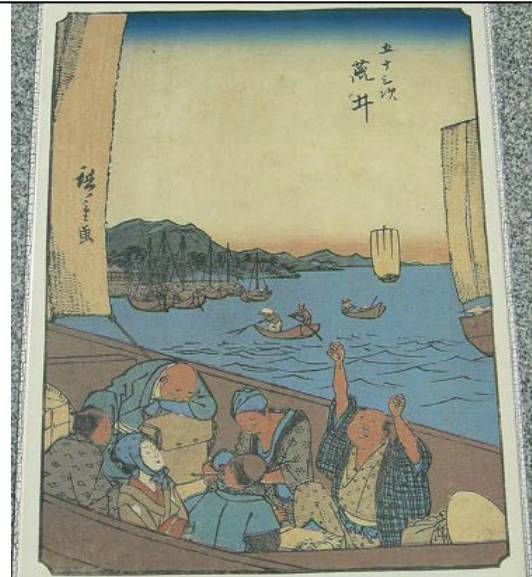


弁天島から、更に2本の橋を渡る、両方共自動車用の橋の横に自転車、歩行者用の橋があり、歩行者用の橋には高さ2mほどのフェンスがあるが、ところどころそのフェンスが破られており、そのフェンスから釣り人が外に出て釣りをしている。橋にはその釣り人の置き土産のヒトデの干物が点々と落ちていて、生臭い。チヌと思われる20cmほどの魚を釣り上げている人もいた。

### 新居宿 31 番目

浜名湖を通り過ぎると新居宿となる。JR新居町駅を過ぎたあたりに、山頭火の句碑「水のまんなかの道がまっすぐ」がある。確かに弁天島を出たあたりからまっすぐな道で、昔は建物が少なく、浜名湖と西浜名湖の間の砂洲の中の本道は見通しがよかったのだろう。

舞阪から新居へ渡船を書いた漫画チックな絵



新居関所の手前の小さな浜名橋に東海道53次の新居宿の色々な絵が描かれてあったが、漫画チックなものが良かった。

### 新居宿の関所

新居には関所があって、その建物が特別史跡として保存されており、入場料400円也を払って見学。昔はその関所の前に渡船場があり、舟から出た旅人はすぐ関所でチェックされるようになっていた。東海道には関所は2箇所しかなく、一つは箱根で箱根峠の難所であり抜け道は少なく、もう一つはこの新居で、太平洋と浜名湖に挟まれた隘路でありこれも抜け道が少なかったとのこと。

新居宿の関所  
縁側の前に「お白洲」がある

説明員によると、関所でチェックするのは身元確認、関所役人はまさにお役人で今も昔も変わらず、前例のないことは絶対しなかったとのこと。官僚に負けるなガンバレ蓮舫、の文字が唐突に頭に浮かんだ。



## 旅籠と水琴窟

新居関所の先に旅籠紀伊国屋があり、関所の入場料に含まれているので見学。



水琴窟と竹筒

建物自体には今迄に見た旅籠と似た様なものだが、庭に水琴窟があった。手水鉢の下に作られているとのことで、長さ2mほどの竹筒が置いてあり、音が小さい為、縁側に座ってその竹筒を耳につけて聞くと、周囲の物音の方が大きく、時々ピンと聞こえるのが多分そうだろうという感じ。

又、旅人用の枕があり、箱枕と言うものは四角い木の箱そのもの、昔の人は頭が固かったのか。

## 江戸時代の無人島漂流者



無人島漂流者の碑

新居宿から東海道は鉄道と離れ、約12Km先の二川までは鉄道の駅は無い。時刻は3時で、歩けるところまで歩いてバスで駅に戻ろうと考え、バスの時刻表を見ると休日は2時間に一本で、都合の良い時間にはバスは無く、この先に進むのはあきらめ、荒居町駅でJRに乗ろうと来た道を引き返す。往きと逆の側を歩いていると、道から奥まったところにある、往きには気づかなかった石碑に気が付いた。石碑には「無人島漂流者、不屈の精神を伝える」とあり、「江戸期 新居人 鳥島に生きた21年」と書かれている。



気になって詳細をインターネットで調べた。

『ロビンソン・クルーソー』が刊行された1719年(享保4年)、奇しくも同年、遠州荒井(現在の新居町)の船「鹿丸」が、仙台からの帰路の途中に九十九里浜沖で遭難し、はるか南の太平洋の鳥島に流された。鳥島は、伊豆諸島と小笠原諸島の間に位置し、最も近い八丈島からの距離も300kmはある絶海の孤島である。遭難者たち12名は自分たちの船の食料、流れ着いた船に積んであった米、そして島に生息しているアホウドリなどを食べて命をつなごうとしたが、9名はその生活の過酷さに耐え切れずに死んでしまう。10年間生き延びられたのはわずかに3名。そして漂流してから20年が経った元文4年(1739)島に新たな漂流者がやってくる。彼らは江戸堀江町の17名であったが、3名の風体があまりにも異様すぎて当初は鬼だと勘違いしてしまったらしい。しかし江戸の17名たちの船に乗って彼らは孤島から脱出し、江戸に帰還することができた。生き残った荒井の甚八・仁三郎・平三郎は、将軍徳川吉宗に謁見、吉宗は新居町の領主である松平資訓に対し、相応の生活援助をするように申渡した。

アップレ、暴れん坊将軍、サンバを踊っているばかりではなかったらしい。

あくがれ

東海道とは何の関係もないが、インターネットで上記の無人島漂流を調べたときに「あくがれありく」との言葉が目をついた。「懂れ歩く」が古語では「あくがれありく」と発音し、「・・・何かに心をひかれ、家を出て憑かれたように彷徨う様子をいう」とのこと。旅の歌人若山牧水には「けふもまたこころの鉦をうち鳴しうち鳴らしつつあくがれていく」の歌もあるようで、牧水の心境を表しているようにも思える。響きの良い言葉の一つ覚えた。

11日目は4.5万歩では約27Km、雨の中を歩くのはイヤなので天気予報を見て週末を2回パスしたが、辛抱できず、曇り時々雨との予報にもかかわらず決行、結局雨は一滴もふらず。

今回も東京駅八重洲口を深夜12時に出る夜行バスに乗り、朝の6時半に浜松着、帰りは新居町駅からJRで浜松、浜松から午後4時半発の高速バスに乗り渋谷に午後8時帰着。

次回は 新居 -> 白須賀 -> 二川 -> 吉田 -> 御油

